
梅雨明けのツィガーヌ

玉井ゆら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

梅雨明けのツイガーヌ

【Nコード】

N1538H

【作者名】

玉井ゆら

【あらすじ】

ツイガーヌに何か思い入れがあるのですか？僕はあなたがこの曲を、誰か一人のために弾いているように感じられます

第一章

彼女は、楽屋の一番居心地の良さそうなソファに身を沈めていた。わずかに十四、五の頃から「天才」の名を欲しいままにしてきたヴァイオリニストは、本番間際だというのにそれほど緊張している様子もなく、それどころか突然の訪問を詫びる僕に、きよとんとした顔をしてみせた。そしてこう言う。

「私が誰にも会いたくないのは、朝なのよ」

初めて直に聞くその声は、彼女の弾くしつとりとした音色とは対照的で、鞠のように元気に弾んでいた。低血圧だから、と彼女は大きな目をくるりと回してみせた。意志と好奇心の強そうな瞳。小柄な身体には、その隅々まで強靱なエネルギーが満ちている。そんな印象だった。肩書きと名前を申し出た僕に、彼女は自分から右手を差し出す。女性にしては力強い、生命力にあふれた握手だ。この手が一流の音色を紡ぎ出すのだと思うと、胸が震えた。

「それにインタビューは嫌いじゃないの」

彼女はにつこりと微笑った。そして僕に椅子を勧める。僕は彼女の向かいに座ると、早速レコーダーの録音ボタンを押し、テーブルの上に置いた。彼女は僕の質問に愛想良く、かつテンポ良く答える。時折、胸元のクロスにそつと指で触れていた。何か考え事をする時の癖なのかもしれない。

僕は、ほつとしていた。なぜなら、彼女はとにかく評判の悪い音楽家だったから、こうしてまともにインタビューに応じてくれることを、実はあまり期待していなかった。リハーサルをすっぽかすなんてことは日常茶飯事、神様のように崇められている指揮者に、たつき激怒せしめたとか、どこぞのオーケストラのコンマスめぐつての不倫騒動だとか、噂を信じるとすれば、彼女の奏でるコンツェルト以上に、ドラマティックな日常を生きている女性だった。客席から彼女を仰ぎ見るたび、僕は考えた。ざわざわと聞こえてくる

傲慢さは、どこまでが真実なのか。舞台上の彼女は薄明かりの中、ただ黙って立っているだけで、その場の空気を支配してしまう。彼女がどんなに破天荒な人間だったとしても、今この瞬間は誰の手も借りられずたった一人で、観客たちの品定めにも似た期待に耐えている。そう思うと僕は胸を打たれた。そして、彼女のツイガー又は僕の心の一番深いところに突き刺さる。この曲を弾く彼女は深い悔恨にうなだれた罪人のように思えた。自らが奏でる悲壮な旋律に、果たして最後の小節まで耐えることができるのかと、僕は不安をかきたてられる。ツイガー又は彼女にとって特別な思いがある曲に違いない。そう尋ねてみた。そしてこの質問は、途端に彼女のあどけない瞳を曇らせた。

「それは難しい質問ね」

と彼女はつぶやく。

「難しいですか？」

思わず尋ねると、彼女はいたずらを見つけられた子供のように、肩をすくめた。

「難しくはないかもしれないけど、長い話になるわ。いいの？」

僕は慎重にうなづく。そう、と彼女は天井を仰いだ。

「ではもう一度、今の質問をして」

「ツイガー又は何か思い入れがあるのですか？僕はあなたがこの曲を、誰か一人のために弾いているように感じられます」

「妹のためよ」

彼女はまっすぐに僕の目を見つめた。その時、若い女性が飲み物を運んできた。ハーブ入りのアイス・ティーを、僕たちを隔てているテーブルの上に置く。彼女はグラスの隣に無造作に置かれていたヴァイオリン・ケースを指した。

「開けてみて」

僕は少しためらい、ケースの掛け金を外す。中から飴色のヴァイオリンが現れる。何百年も前に作られた名器中の名器ストラディバリウスは、手を触れることもはばかられる程の神聖さを保って、ひ

っそりと眠っていた。この眠りを覚ますことが許されるのは、今はこの目の前にいる「天才」ただ一人。彼女はケース内の小物入れのふたを開け、一葉の写真を取り出した。

「私の家族よ」

撮影をしたのは家の庭のようだった。白衣を着た優しそうな男性に寄りそって、若い女性が立っている。その前には幼い少女と、大きな真つ白い犬。そして男性は小さな女の子を抱いていた。女の子はカメラから顔をそむけるようにして、白衣の襟を小さな手で握り締めている。彼女が「妹」か。

「人生には辛いことが多いけど、彼女にはあまり不幸になつて欲しくないの。そうなると私、責任を感じちゃうのよ。過保護だと思っ？でも仕方ないの。妹が　あきら暁がこの世に投げ出されたのは半分、私の責任だから。私の一言がなければ、暁は今ごろ、天使と一緒に雲の上で綿菓子を作ってたかもしれないわ」

彼女はふつと息をついて、胸元のクロスに触れた。

「そうね。まず、私たちの両親のことから話していいかしら」

第二章

「結婚してください」

法律で決まってるわけじゃないけど、この言葉を口にするのはた
いがい、男の方よね。だけどウチの両親の場合、この台詞を言った
のは、母の方だった。ママは当時、音大でヴァイオリンを専攻して
いた。父は獣医。二人をひき合わせたのは、ママが飼っていた犬の
ブランカ。真っ白で毛がふさふさしてて、本当にかわいい犬だった
けど、大きい割にはケンカが弱くて、近所の犬に追いかけて逃
げ回ってる時に、自転車の前に飛び出して怪我をしたんですって。
そのブランカを連れてったのが、パパの病院だったってわけ。幸い、
怪我は軽く済んで、ブランカは何回か通院しただけで、元通り元気
になった。重症だったのはママの方。パパに会ってからというもの、
ヴァイオリンの練習も手につかず、食事も喉を通らずで大変だった
みたい。大事な試験を一つ落としたって言ってた。

「初恋だったの？」

何度も聞かされる話にその都度、私も同じ質問をした。ママは否
定したけど、恋にあまり免疫がなかったことは確かね。来る日も来
る日もヴァイオリンばかり弾いて、健全じゃないわよ。短い診察の
間、パパのどこにそんなに惹かれたのか、ママは事細かに語って
くれた。まず、ブランカの頭を撫でる手が素敵だったこと。怪我の様
子を説明してくれる口調が、シヨパンのノクターンのように静かで、
心に響いたこと。時折浮かべる微笑が、胸が痛くなるくらい優しか
ったこと。そして、ブランカの怪我が全快した翌日、ママはヴァイ
オリンケースとスーツケースを下げて、病院を訪れた。もちろん、
念入りにシャンプーをしたばかりのブランカも連れて。それで言っ
たのがこの台詞よ。

「結婚してください」

それに対してパパは何て言ったか。

「わかりました」

ただこれだけ。わかりました。この言葉にどんな想いが込められていたのか、パパに何度聞いても微笑するだけ。父も母に一目惚れをしたのか、どうせ熱が冷めればすぐ出ていくだろうと思ったのか、わからない。とにかく結婚して半年後、ママは音大を卒業した。そしてさらにその三ヶ月後に私が生まれた。葵^{あおい}という名前は父がつけた。

「タチアオイの花が天井まで咲くと、梅雨が明けるんだよ」

じめじめした梅雨のとき、パパは決まってそう言っていた。憂鬱な季節が過ぎ、私の誕生日が来る頃、空がカラ、と晴れて、世界が一気に鮮やかになる。空の色も並木の緑たちも。パパはどんな時も穏やかで優しくかった。動物にも人間にも。ママは　なんとというか感受性の豊かな人だった。悪く言えば世間知らず。でも愛すべき人だと思う、心からね。ママは物心つかないうちから私にヴァイオリンを持たせた。毎日毎日繰り返される単調なレッスンに、うんざりする日もあったわ。そんな時は、ママがヴァイオリンを調弦する音を耳にするなり、私はすぐパパの膝に逃げていった。「病院の方には行っちゃいけません」何度もそう言い聞かせられたけど、助けてくれる人は他にいないんだもの。ブランカじゃ頼りにならない。ママが追いかけてきて私を抱き上げようとするので、私は必死になってパパの白衣を握り締めた。

「ヤダ、ヴァイオリンなんか弾かない」

この時診察室の患畜はいなかったけど、私の声は待合室まで響いてたと思う。だからパパは苦笑する。

「天気がいいから、ブランカを連れて公園でも行ってきたら？葵は元気が有り余ってるみたいだから、少し外を駆け回ってくるといいよ」

昼間体力を消耗しないと、夜、寝つけず大騒ぎするものだから、父も母も随分てこずったみたい。

「ええ、レッスンが済んだらね」

と、ママは一步も譲らない。そしてこう言う。

「葵はヴァイオリンが好きなのよ。音楽が好きなの」

「好きじゃないよ」

私は抵抗した。大嫌いな人参を食べさせられる時と同じように、顔をしかめてみせる。

「いいえ、好きなの。ママにはわかるわ」

なぜかママは断言した。

「そしてそれ以上に音楽に愛されてるの」

これって一種の呪いよね。そしてママはさっさとパパから私を引き剥がし、リビングへと連れていってしまう。部屋の真ん中に下ろされると、子猫のミーシャが同情するように、縞模様の身体を私の足に摺り寄せてきた。ミーシャはひどい雨の日、病院の前に捨てられてたのをパパが見つけた。ママがヴァイオリンを差し出す。ひんやりとした手触りの楽器は、なぜか吸い付くように、私のあごの下におさまる。弓で弦を弾くと、身体中に豊かな音色が響き渡る。自分のすぐそばに音楽がある。そう感じられる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1538h/>

梅雨明けのツィガーヌ

2010年12月9日14時15分発行